

いつの日か生命結ばん

(昭和四十一年寮歌)

須藤洋一君 作歌
吉川正文君 作曲

序

重畳たる手稲藻岩の山脈を吾が宿舎の青垣となし
鬱乎たる原始の叢林を吾が逍遙の小径となす。
吾が寮友よ草原に出でよ、暗き孤城より出でんかな。
深遠き蒼穹あまりに青く、輝く雪原あまりに白し。
さればよしその身は平々凡々ならんとも、吾等が野望尽くるを知らず。
静寂を破る蜚声に、吹雪鎮むる高吟に青春の意気託しな

一

いつの日か生命結ばん
碧空高き楡よポプラよ
黄金なす銀杏並木よ
枯れ枯れと曠野に朔風吹けば
荒涼の憂愁よぎりぬ

三

鶏はまだ長鳴かずして
貪れる熟睡をあとに
仄暗き叢林に佇立てば
今いずこ青き野望は
消え行くや先人の遺声

五

睡み来て親友は高唱えど
舌苦き地酒に酔い痴れ
ストームに身は狂乱うとも
忘れ得じ果てなき旅路
この惆悵誰に語らん

二

島松の雪の路上に
手を振りし遠き日の夢影
去り行きぬ偉大なる巨影
君聞くや馬上の声を
広ごれる石狩の原野に

四

蝦夷人よ今こそ瞑想え
星辰しるき彼の冬空に
天翔ける天馬の行方
吹雪き荒ぶ北風をつぶてを
若駒の鞭とはなさん

六

暖かき光求めて
彷徨えり冷たき野末
北国に春来りなば
若き日の稚き愁思は
雪の如融けて流れん